

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

今を生きるストリート・エスノグラフィーの実践：
すれ違う権力のまなざしとストリートのまなざし：
どこにも向かわないストリートの時空：
希望なき希望：村人たちとストリート：
西ティモールのアナ・ボトルにみる希望

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森田, 良成 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001234

村人たちとストリート 西ティモールのアナ・ボトルにみる希望

森田 良成
大阪大学大学院

東インドネシア、ティモール島の西端に位置する町クバンでは、丘陵地の農村地帯から出稼ぎにやってきた男たちが、廃品回収業によって現金収入を得ている。彼らは「アナ・ボトル（瓶の子）」と呼ばれる。

本稿では、都市のストリートにおけるアナ・ボトルたちの暮らしぶりについて、いくつかの情景を描写する。そのうえで、彼らがストリートにおいて見出す希望について論じる。村は都市のストリートに接続され、村人たちはストリートへとやってくる。そして彼らは、ストリートからさらにどこか先へと行こうとする。しかし、彼らのあいだでは新天地への旅立ちがたびたび熟っぽく語られはするのだが、たいていの場合は何も起きない。

ここでは、村人たちが次々に見出す希望とは、その実現可能性を問われないがゆえに希望たりえていることを示す。

- | | |
|--------------------|-------------|
| 1 西ティモールの村人たちのいま | 2.3. 少年たちの夜 |
| 2 カンブン・ソロールのアナ・ボトル | 3 アチェへの旅立ち |
| 2.1. アナ・ボトルになる | 4 道の果てるところで |
| 2.2. ストリートのなまけ者 | ——ストリートの希望 |

キーワード：西ティモール、アトニ・メト、出稼ぎ、廃品回収、希望

1 西ティモールの村人たちのいま

本稿の舞台となるのは、東インドネシア、ティモール島の西端に位置する町、クバンである。人口25万人を擁するこの町は東ヌサ・トゥンガラ州の州都であり、周りのいくつもの島々からさまざまな人びとが集まるため、都市の規模のわりにきわめて複雑な民族構成を特徴としている。一方、クバンなどごく限られた都市部をのぞけば、西ティモールの大部分は起伏の激しい乾燥した丘陵地帯であり、インドネシアでも「低開発」「貧困」地帯として知られる。この一帯ではアトニ・メトという民族集団が、近年さかんな内外からの開発援助の影響をそれぞれの形で受けながら、トウモロコシ栽培を中心とする自給度の高い農業を営んで生活している。

現在では、村でのふだんの生活においてもお金は必要である。調理に用いる塩、夜に明かりを灯すための灯油といった生活必需品のほか、来客をもてなすためのコーヒーを切らさないようにしたり、子どもの教育費を払ったりしなければならない。また、これ

までつちかわれてきた村人どうしの絆や価値を再生産するために、互酬性に基づく贈り物のやりとりを円滑につづける必要があり、これにもお金がかかる。より豊かな生活を手に入れたいという欲求もある。コンクリート製の壁にトタンの屋根がのった家を立てたい。市場や近隣の村々への移動に圧倒的な機動力を発揮するバイクを買うことができれば、村か町でバイクタクシー業を始められる。

こうして農民たちは、村を出てクパンの町に出稼ぎにやってくる。しかし彼らにできる仕事は限られている。クパンには特別目立った産業も、単純労働の大量雇用を生み出す工場もない。出稼ぎの村人たちが参入できる仕事といえば、ゆでトウモロコシや菓子類などの軽食や、新聞、ビデオ CD といったさまざまな商品の行商、せまい車内に 10 人以上の乗客を詰め込んで走るミニバスの車掌、買い物客でごった返す市場と表通りとを往復する荷運びといったものである。町で村人たちに開かれたこうした仕事の 1 つとして、廃品回収業がある。この仕事をこなす出稼ぎの農民たちは、クパンにおいて「アナ・ボトル（瓶の子）」と呼ばれている。彼らは荷車を押して町を歩き回り、空き瓶や、穴の開いた鍋や錆び付いた自動車部品といった金属類を集め、換金することでお金を得ている。

本稿で扱うストリートとは、村人たちが彼らにとってはまぎれもない「大都会」であるクパンにおいて、お金を稼ぎ、生活を続けていく場所のことである。

海辺のターミナルの近く、表通りから少し入った「カンブン・ソロール」と呼ばれる区域の片隅に、アナ・ボトルの生活の拠点の 1 つがある。廃品回収のボスが彼らにあてがった簡素な小屋の広さは、アナ・ボトルが全員で生活していくためには不十分である。よって彼らが食事をしたりくつろいだりする場所は、もっぱら屋外となる。夜には、路地に面した鉄くず置き場の脇や、大量の空き瓶の上などにダンボールを敷いて眠る。アナ・ボトルたちがふだん仕事で歩き回る目抜き通りや路地のことは、もちろんストリートと呼ぶことができるだろう。さらに、彼らの仕事以外の生活の場もまた、ストリートから明確に区切ることのできない延長上にある。

クパンは、村人たちにとっては大都会であっても、首都ジャカルタなどに比べれば辺鄙きわまる一地方都市にすぎない。そのようなクパンのストリートで、アナ・ボトルたちはブリコラージュとも呼ぶべき、大都市の喧騒の中で柔軟かつしたたかに生き抜くための技術を身に付けていくのではない。彼らは新しい生活環境に器用に適応していくというよりは、農民のままで、不器用かつ体力まかせの方法で村と町という 2 つの世界を架橋しているのである（森田 2008）。

アナ・ボトルの町での仕事ぶりについては、既に別稿で論じている（森田 2008）。本稿の以下では、町におけるアナ・ボトルたちの仕事以外の生活ぶりに注目し、その断片を記述していく。彼らにとってストリートは、さまざまな希望が漂う場所である。ただしこの希望とは、その実現の可能性について必ずしも問われないものである。

2 カンプン・ソロールのアナ・ボトル

2.1. アナ・ボトルになる

クバンにおける廃品回収ビジネスは、1980年前後に1人のジャワ人が始めた。

アナ・ボトルたちが暮らすカンプン・ソロールは、キリスト教徒が住民の8割と圧倒的多数を占めているクバンにおいて、宗教的にはマイノリティであるイスラム教徒が多く暮らす地区として知られている。

アナ・ボトルたち自身はキリスト教徒であり、南中央ティモール県のある地域出身の男たちである。「アナ(子)」とはいうものの、その年齢層は10才前後から40才近くまで幅広い。アナ・ボトルたちは、ジャワ人のボスから荷車を借りて、それを押して町を1日歩き回り、空き瓶、鉄、アルミニウム、銅などを集めてくる。一定の資金を持ち歩いて買い取って集める大人たちの中には、荷車に玩具や日用品といったこまごまとした商品を吊るして行商を兼ねている者も多い。一方、少年たちのなかには、まったくお金を持たずに、ゴミ捨て場などを回ってひたすら拾い集める者たちがいる。

彼らはずいぶん所持品を、リュックや鍵のかかる木箱に入れてカンプン・ソロールの小屋の中で保管している。荷車に吊るしたままの大切な商品は、ときどき夜の間になくなってしまう。雨季ならば、深夜になって降り出した雨に飛び起きて、寝場所を移らねばならないこともある。早朝に、イスラム教徒であるこの地区の住民たちに礼拝を呼びかけるアザーンが響き渡れば、彼らも起き出すよりほかない。往来から丸見えの場所で、いつまでも眠っているわけにはいかないのだ。

アナ・ボトルたちは、町で知り合った私を口々に「今度俺といっしょに村に行こう」と誘った。日本人の知り合いをいきなり連れて行って、家族やほかの人たちを驚かせたという思いがあったのだろう。だがそれだけではなく、町にいてはできない客人へのもてなしを、私に対して村の自分の家で存分にしてやりたいという気持ちもあったようだ。町では自分の家がないので、日本という遠くの国からやってきた私をテーブルにつかせてコーヒーや食事を勧めることも、寝床を用意してやることもできずに残念でならないと言われたことがあった。

クバンの東約180kmのところ、アナ・ボトルたちの村はある。勾配のきつい土地に小さな家々が建ち、トウモロコシ畑が広がる。少年たちは1年のほとんどを町で過ごし、村へはクリスマスくらいにしか帰らない者も多い。大人たちは村に妻子を残してきているので、ふだんは2~3ヶ月ほど町で働くといったん村へ戻り、またしばらくして町に帰ってくる。

ここ10数年ほどの間で、村の交通事情は劇的に変化した。かつては郡の中心部の市場までしか入ってこなかったバスやトラックが、直接村まで来るようになった。尾根伝いの道路でバスやトラックが来るのを待ち、それに飛び乗りさえすれば、村人たちはそ

のまま町へ、カンブン・ソロールへと行くことができる。

村を貫くこの道路の両側には、村でも経済的にいくぶん豊かな世帯が、トタンの屋根とセメントの壁の家を構えている。電気が入っていない村の夜の闇に、乗客や身内を乗せて村を走り抜けていくバイクの音がこだます。その響きが道からだいふ離れた家の中まで届くと、炬を囲みながら誰かが「ああ、あの音はピーターのバイクだな」とつぶやいたりする。時にはこの道路を、先頭に巨大なアンテナを備えた国連のランドクルーザーが通り抜けていく。村のそばで日本の開発援助による橋の建設が始まると、「黄色いヘルメットを被った日本人たち」が乗り込んだ自動車も、目撃されるようになった。

人びとを載せて村を発ったバスは、第2次大戦中に日本軍が開いたという道を抜け、1時間ほどで郡の中心地へと至る。さらに1時間ほど走ると、勾配がだいふ緩やかになってきて、舗装道路の陥没や剥がれもじょじょに目立たなくなっていき、やがてティモール島を横断するトランク・ロードに出る。この道路は、20世紀はじめにオランダによって切り開かれたもので、対向車ともそこそこスムーズにすれ違うことができる。ここまで来れば、いよいよバスはスピードをあげてひた走る。村からクバンまでは直通でいたい6時間ほど、あるいは途中の県の中心地での乗り換えにてこずれば12時間以上もかかるが、村はたしかにクバンのストリートに接続されている。

年配の男たちは、かつて彼らが若く、クバンに来たばかりのころには、村には町を一度も見ずに一生を終える者が多かったと語る。現在では、インドネシア語をまったくといっていいほど話せない老人が、カンブン・ソロールまで息子を訪ねてやってくる。到着した老人たちを、アナ・ボトルたちのうやうやしい対応と、カンブン・ソロールの他の住民たちの無関心が迎える。乳飲み子を抱いた母親が、夫や上の息子を訪ねて来ることもある。運賃を免除される幼い少年たちは、村でバスやトラックの荷台にただ飛び乗ればよい。カンブン・ソロールでバスを降りると、そこには父親やおじや兄、村でいっしょに遊んだ仲間たちがいる。最初のうちは周りの誰かが食事の面倒くらい見てくれるだろう。翌朝あたりから、仕事に出かけていく誰かのあとについて、町を回ってみる。数日も過ごせば、自らもボスから荷車を借りるようになる。見るもののすべてが新しいこの町で、インドネシア語にも少しずつ慣れていくだろう。こうして新しいアナ・ボトルがまた1人、町での暮らしをスタートさせる。

2.2. ストリートのなまけ者

朝の7時半ごろ、少年2人が荷車を押して、他のみなとともにカンブン・ソロールを発った。まだ10才前後のカノル、彼より2〜3才年上のジュリである。

アナ・ボトルたちは毎朝、カンブン・ソロールから少し離れたある通りに集まり、1〜2時間ほどをここで過ごす。この時間、彼らの3〜40台の荷車が通り沿いにずらりと並ぶ。この通りにある2軒の店で、彼らは行商のために荷車に吊るす商品や、空き瓶など

と交換するために持ち歩く風船を仕入れる。おしゃべりをしたり、タバコを吸ったり、ビンロウを嘔んだりしながらそれぞれの仕事の支度を進めていき、彼らはやがて少しずつこの場を離れていく。

ボールを膨らませることは、アナ・ボトルたちの朝の日課である。店に入ると、折りたたまれたビニール製のボール10枚入りを1パックと、風船を1パックか半パックを買う。店を出て、適当な場所に停めてある自分の荷車のところまで戻る。座わり込んで、たたまれたボールを1枚抜げて、切れ目から中へ風船を差し入れ、息を吹き込んで膨らませる。ボールそのものはビニールを張り合わせただけの直接空気を入れることができないつくりなので、こうした手順が必要になる。膨らませたボールに紐を通して束ね、荷車の前に吊るす。これがアナ・ボトルのもっとも基本的な廃品回収兼行商の形である。ボールは1つ1,000ルピア（約10円）で売れるので、3つも売れば1食分の売上げを稼いだことになる。行商用の商品を仕入れる十分な元手をもたない者でも、空き瓶との交換に使えるように、せめて風船だけは買っていく。風船すら買わないのは、拾い集めるのを専門にする少年たちだけである。

8時半ごろ、ジュリとカノルの2人もようやくそれぞれの荷車を押して、表通りの公園前まで移動した。ここで流しのトラックを拾って適当な場所まで運んでもらうつもりだ。だが2人は10時ごろには、からっぽのままの荷車を押してカンブン・ソロールに戻ってきてしまった。先に戻っていた私がいっただいどうしたのかと問うと、2人はただ「車が拾えなかったのさ」と答えた。2人はボスが出かけていたのをさいわいに、さっさと荷車を片付けてしまうと、彼らの間で流行っていたビー玉遊びを始めた。1回の勝負に500ルピアを賭ける。

やがてボスがバイクで帰ってきた。ジュリとカノルはビー玉を中断して、神妙な面持ちで彼のそばへかけ寄る。ボスは無言で手の平を2人の前に突き出す。つまり、「仕事に出ないのなら、今朝渡したお金を返せ」ということだ。ボスは2人の生活ぶりをよく知っている。今朝、1日の仕事と食事のために渡したお金を、彼らは明日までにきっと遊んで使ってしまうだろう。

ジュリが言った。「ちがうんだ、ボス。今朝もらったぶんは、もうお店で風船とボールを買うのに使っちゃって、残ってないんだ。」ボスがじゃあ見せてみると言うので、2人は小屋の中から黒いビニール袋を取って来て、その中を見せる。カノルは、膨らまず前の小さく畳まれたボール10枚入りを2パックと、100個入りの風船を2パック持っていた。ところがジュリには、ボールは2パックあったのだが、風船は半パックしかない。これでは計算が合わない。「ちがうんだ、ボス。これだけじゃなくて、まだあるんだ。ほら、ここにも風船がまだ半パックある」とジュリは言ったが、「それは昨日からあるぶんじゃないか」とボスは見抜いた。一瞬言葉につまったジュリは、「残りのお金はパウルに渡してしまったから……」と、この場にはいない仲間のパウルを犠牲にした。

ボスにはもちろん言わなかったが、ジュリとカノルは今朝店の前で、ボスから受け取ったばかりのお金の半分ほどを、カノルの兄のパチェに渡してしまっていた。パチェは右手の指をケガしたので縫わなければならないと言ったそうだが、それが本当かどうかは2人にもわからない。

パチェは、長く伸ばした、ゆるやかにウェーブのかかった髪を茶色く染めている。長身ですらりとしていて、ぱっと見たところでは「田舎者」っぽさを感じさせない。今朝、私が彼の手に見たのは、縫わなければならないような傷ではなくて、小さな白い紙切れだった。彼はそれを、座ってボールを膨らませていた1人に見せると、「これってなんて読むんだ？」と尋ねた。そこには女性の名前と携帯電話の番号が書かれていた。どこかで口説いて手に入れたのだろうか、パチェは字が読めない。

パチェが町でいったいどうやって生活をしているのかは、ジュリにもカノルにもよくわからない。気が向いたときにふらりとカンブン・ソロールに姿を現して、ごくたまには廃品回収に出て行くこともある。ふだんは往来で、アナ・ボトルのような出稼ぎの少年から「税金」をせびってみたり、知り合いのバイクを借りてバイク・タクシーをやったりしているらしい。ボスは、パチェが荷車を借りて出て行くことを容認しているが、仕事の元手を貸してやることはまずないし、パチェの方でもそれをわかっているので頼まない。

ジュリの横でボスからの非難をまぬがれていたカノルだが、大きな問題をじつは抱えていた。2ヶ月ほど前、借りもののバイクを乗り回していて派手に転んでしまったのだ。見るからに痛々しい大きな傷を左足の甲につくり、泣きながらカンブン・ソロールに戻ってきた彼は、片足を引きずってどうにか歩けるというありさまで、しばらくの間は仕事に出ることもできなかった。カノルはバイクの修理代として多額の借金を背負ってしまった。昨晚もバイクの持ち主が取立てに来ていたが、カノルは子供らしいふてくされた表情でなんとか追い払っていた。

再開したビー玉の勝負にも飽きてしまうと、ジュリとカノルは小屋の中に入って、ホコリだらけの床にゴザを敷いて横になった。昼過ぎに起き出すと、遅い昼食をとった。カンブン・ソロールには、アナ・ボトルたち向けに安い食事をつくっているジャワ人の女性がいる。そのすぐそばには、カノルらとは別のもう1人の廃品回収のボスがいる。カノルはこのボスの母親が経営しているキオスクに寄り道して、タバコを2本買った。そのときに彼女にお使いを頼まれて、駄賃に1,000ルピアをもらった。2人がまたビー玉をやりだすと、やがて他の少年たち、パウル、ゲレ、ソンの3人がそろって仕事から帰ってきた。3人は、廃品の計量を済ませた者から順に勝負に加わっていった。

ぱっちりとした目に長いまつげのゲレが、ポケットの中のビー玉をじゃらじゃら鳴らしながら、「カノルのやつ、最初は30,000ルピアも勝ってたのに、結局1,000ルピアの負けだっけさ」と笑った。ゲレは、村の小学校に4年生まで通ったあと、カノルより遅

れて1年ほど前に町にやってきた。

「ゲレ」というのは、「ゲレ、2つの味」という彼につけられた不名誉なあだ名を縮めたものだ。まだ町に来たばかりのゲレが、ミニバスに乗っていたときのことだ。クバンを走るミニバスには、決まった停留所がない。乗客は降りたい場所が近づくと、手を叩いたり、硬貨や爪で車内の金属のバーをカチカチと鳴らしたりして、運転手や車掌に合図を送る。ところが、もう降りなければとゲレがいくらバーを叩いても、うまく音が出ない。運転手も車掌も、ゲレの合図にまったく気づいてくれない。このままでは乗り過ごしてしまう。「ゲレ！ゲレ！」あせるあまり、ゲレは意味不明な言葉を叫んでしまった。本当ならば、インドネシア語で「キリ（左へ）！」と告げるべきところだったのに。

こうしてまず、「ゲレ」の呼び名が彼に与えられた。それからしばらく経ったある日、カンブン・ソロールの小屋の中で、アナ・ボトルたちはテレビを見ていた。画面がチョコレートのコマーシャルに切り替わり、アニメーションの青い鳥が商品名を叫んだ。「ゲリー！2つの味！」これを聞いて誰かが、「たしかにいま、『ゲレ』って言ったぞ！」と言い出して、居合わせたみなりがげらげらと笑い転げた。こうして彼はついに、「ゲレ、2つの味」と呼ばれるようになったのだった。この一連の物語を誰かが口にするたびに、少年たちは初めて聞いたことのように何度でも大笑いし、ゲレはじつに不愉快そうな顔をする。

さっきからビー玉を巧みにあやつっているジュリは、しばらく前に、錆びついた自転車のフレームを荷車にのせて帰ってきた。それからハンドルやペダルなどの部品を買い取ったり拾ったりして集め、値の張らない小さな部品ならば新品を買ったりして必要なパーツを揃えていき、ついに自転車を組み上げてしまった。水色のペンキを塗って仕上げると、うまく錆も隠れた。ブレーキはついていないが、足の裏で後輪をつよく押さえつければきちんと止まる。ジュリはこの出来栄えにじつに満足していた。

村とは違って町の道は幅が広いし、滑らかに舗装されている。海岸沿いの道路は平らで、どこまででも走って行けてしまいそうだ。カノルたちは、1,000ルピア、2,000ルピアとジュリにお金を払い、この自転車を借りてカンブン・ソロールを飛び出していく。どこか目当ての場所があるわけでもなく、ペダルをただ力任せにこいで、ふだん荷車を押して歩くのとはまったくちがった速度と身軽さで、町を走り抜ける。そしてしばらくしてから、満足げな表情に汗を浮かべて帰ってくる。

ジュリは次に村に帰るとき、この自転車もバスに積んでいくつもりだという。村でしばらくは自分で乗り回してみたら、もう誰かに売ってしまおうと思っている。

「どうせ稼ぐんなら、頭を使わないと。荷車を押してやっと少し稼いで、その日食べるのに使っちゃったらそれで終わりだなんて、俺はいやだよ。」「自転車の値段は、15万ルピア（約1,700円）でもいいさ。ようは、カネが欲しいんだ。」

アナ・ボトルの中でもジュリは、ボスからあまり信用されていない「なまけ者」のうちの1人だ。以前、ジュリやカノルら5人の少年たちが、町の外にある市場に仮の寝場所を定めて、泊りがけであたりの廃品を買い集めるという試みをしたことがあった。出発の際には、多少まとまった資金をボスから前借りした。10日ほど経ってから、ジュリとカノルの2人がカンブン・ソロールに戻ってきて、ボスに追加の資金を求めた。

集めた鉄くずを積み上げていったら、もう2山もできてしまった。空き瓶もたくさん手に入って、袋詰めしようにも袋のストックがとっくに切れてしまった。あとは適当なトラック運転手を見つけて、カンブン・ソロールまで運んでくるだけ、しかもこれからまだまだ集まりそうだ。ジュリとカノルは言葉を畳み掛けるのだが、ボスはすでに集めてあるという廃品をまずは運んで来るように言い、とりあわなかった。じっさい、ボスのこの判断は正しかった。本当のところ彼らは、滞在期間のわりにまだわずかな廃品しか集めておらず、それなのに、もはや食事のための費用すら底をついてしまっていた。だが、カンブン・ソロールに今のままで帰るわけにもいかない。そこで彼らは、ここはまずボスから追加の資金を得て、なんとか状況を挽回したうえで、それから帰ってこようと考えたのだった。ところがボスに断られてしまった。やむをえず数日後、彼らはカンブン・ソロールに引きあげてきた。廃品を積んだトラックの荷台には、まだ半分も余裕があった。遠征の結果、少年たちは借金をつくり、ボスからの信用も失った。何人かはカンブン・ソロールに戻らずに、そのまま行方をくらませてしまった。

ジュリはこの遠征を振り返って、「そりゃそうさ。あっちでは寝たり遊んだりしてただけなもの」と言った。「まあ、俺は今までもこんなだったんだ。どうせ死ぬまで貧乏だよ。」

2.3. 少年たちの夜

カノル、ゲレ、ソン、パウル、それにシモン、アムロス、アバ。すっかり日が暮れて人通りも絶えてしまった夜の町へ、少年たちがくり出していく。カンブン・ソロールから歩いて20分ほどのところにある、市場のそばの水場へ向かうのだ。

少年たちは、彼らの民族言語であるダワン語で他愛のないおしゃべりに興じながら、家々が建ち並ぶ静かな路地を通り抜ける。笑いが起こり、つい話し声が大きくなってしまふ。誰かが「おい、土地の言葉で話すのはやめろよ」といさめた。なぜなら自分たちはオラン・コタ（町の人間）なのだから、インドネシア語を使うべきなんだ。往来で、ダワン語で、しかも大声でしゃべるなんて、それじゃあまるっきりオラン・カンブン（田舎の人間）じゃないか。そんな注意を誰かがしたが、話し声はすぐに、使い慣れたダワン語に戻ってしまう。

表通りに出た。昼間ならばひっきりなしに車が通り、歩道には制服に身をつつんだ学生たちがたむろしているが、この時間には人影さえない。カノルはおかまの真似をして、

体を大きさにくねらせながら歩いてみせて、みなを笑わせた。まだまだこれから背がのびていくだろうアバは、掛け声とともにジャンプして、交通標識に片手でタッチしてみせた。彼らの遠慮のない笑い声が、静かな表通りに響く。日中、彼らは荷車を押していて、かわいそうだと同情されて、古着と古グツをもらうこともあったし、ひどい時には自分よりも年下の子どもから小石を投げられることもあった。盗人扱いされてきつい口調で追い払われることも、柄のわるい連中に小銭をせびられることもあった。

15メートル四方のコンクリートのプールが、人びとでにぎわっている。中央のつたない造形のオブジェからは、水が大きな音を立てて流れ落ちている。暗がりの中のプールでは、何人かが水遊びがてら体を洗ったり、歯をみがいたりしているのが見える。その一角と、そこから市場の方へ延びていく水路沿いには、洗濯をしている人々がいる。さらに離れたところでは、カノルたちと同じくらいの少年が、バケツに水を汲んでミニバスを洗っている。

辺りには灯りが無い。少年たちは服を脱ぎ捨てると、うす暗い水の中へ勢い良く飛び込んでいく。カノルの左足の大きな傷は、まだ治りきっていない。彼は服を脱がずに、プールサイドから手を伸ばして水をすくい、髪をぬらした。茶色く染めたカノルの髪は、やわらかくてまっすぐなのだ。年頃の少年たちには、生まれつき縮れている自分たちの髪の毛を、田舎者じみていてかっこわるいといやがる者が多い。縮れぐあいがとりわけきつい者を「髪がスーパーミー（即席めんの商品名）だ」とからかったり、洗濯石鹸やら何やらを混ぜてつくった自家製の薬品で、直毛への矯正を試みたりする。

この面子の中で1人だけ少し年上のアムロスは、早々に水から上がってしまった。誰かがさっき脱ぎ捨てたズボンを手に取ると、鼻に軽くあててにおいを確かめてから、それで顔をぬぐった。それからまた誰かのシャツを拾い上げると、体を拭いた。他の少年たちは、まだ水の中ではしゃいでいる。泳いだり、もぐって誰かに襲いかかったり、つま先までびんと伸ばしたきれいな逆立ちをしてみせたり。

カノルは、来る途中でキオスクでタバコを買ったときに、ついでに小さな袋入りのシャンプーも買っていた。タバコ1本と同じ250ルピアで買える、5~6mlほどのわずかな量が入ったものだ。カノルはこの封を切ると手の平に少し出し、濡らした髪になじませて、手ぐしできれいなオールバックに仕上げた。少年たちはシャンプーを、キオスクで同じように売られている「ギャッツビー」とともに、もっぱら整髪料として使っていた。いいにおいはするけれど、髪が含んでいる水で泡が立ち、頭が白くなっていく。私がそれまでも何度か、「それは髪をセットするためのものじゃなくて、洗うためのものだ」と言ったのに、まったく聞いてくれない。すでに服を着たアムロスがカノルの様子に最初に気づいて、自分にもくれと言った。他の者たちも次々に水から上がってきて、残りを奪い合って髪に塗った。少し出遅れたソンは、もうぺちゃんこになってしまった袋をたんねんにしごいて残りを集めると、ぐりぐりの坊主頭に塗りたくった。

少年たちはすっかり上機嫌で、帰路についた。ソンが皆から少し遅れると、シモンが振り向いて、「あれ、『真っ暗』はどこだ？ 姿がぜんぜん見えやしない」とお決まりの台詞をはいた。ソンは肌の色がとりわけ黒くて、「真っ暗なソン」が呼び名になっている。肌のあまりの黒さは、縮れ方のきつい頭髪とともに「かっこわるい田舎者」を連想させる。

一軒の家の前で、2人の女の子が立ち話をしている。その家で使用人として働いているのだろう。村から町に出てきた出稼ぎの若者たちは、男ならば廃品回収や、さまざまな行商、ミニバスの車掌といった仕事に就く。アナ・ボトルたちの村の場合は男ばかりだが、他の村々からは女たちも出稼ぎに来る。彼女たちは、食堂での下働きや、裕福な家庭の使用人をしたりする。

少年たちは2人の少女の前を通り過ぎながら、わざと聞こえるような声で、「アナ・ティモールだぜ」「オラン・カンブン（村の人間）だ」と口々にはやしたてる。「アナ・ティモール（ティモールの子）」はしばしば「田舎者」のことを指す言葉だ。しつこい冷やかしの腹を立てた片方の女の子が、こちらをにらんで言い返す。「あんたたちだって、アナ・ティモールじゃないのさ！」「いいや、ちがうさ」シモンはひるまない。「俺たちは、オラン・コタ（町の人間）だもんな！」

3 アチェへの旅立ち

月曜日の朝、アナ・ボトルたちはいつものように通りで支度を進めながら、タバコをふかしたり、ビンロウを囁んだりしている。

アナ・ボトルたちから「マス」と呼ばれている顔なじみのジャワ人の男性が、ここ数日は彼らと同じように荷車を押して廃品回収に出ている。

「これ（廃品回収）をやってみて、最初の日には10万ルピアを稼いだんだが、それからはだめだ。だんだん落ちてきて、昨日なんてとうとう1.7万にしかならなかった。夜もなかなか眠れなくて、本当にまいった。だけど、まだ様子を見ている段階だ。」

「ジャワではなんだって金になるんだ。プラスチックだって、『アクア』のグラスだってそうさ。だいたい前でも1kgあたり600ルピアだったから、今じゃきっと1,000以上になっているだろう。アルミニウムだって、ジャワだったら1kgで1.7万ルピアだぜ（『アクア』はミネラルウォーターの商品名で、グラス型のプラスチック容器入りのものがキオスクなどで1つ500ルピアで売られている）」

すぐそばに座ってボールを膨らませていた、若い父親ミングスは、最後の「1.7万ルピア」という数字に敏感に反応して、こちらに顔を向けた。アルミニウムはクパンでは1kgあたり7,000ルピアだ。プラスチックにいたっては、値段が安すぎて集めている者はほとんどいない。通りの脇やゴミ捨て場では、空になったアクアのグラスが散ら

かったまま放置されている。

キアスは、アナ・ボトルをするようになってもう20年ほどになる。キアスもミングスも、村と町をひんぱんに往復し、村で待つ妻と子どもに稼いだお金を届け、農繁期には自分のトウモロコシ畑を耕す。キアスはこの日、いよいよ彼の割礼を終らせるために、港の近くにある売春区域に向いて女性を買うらしい¹⁾。数年前にすでに割礼を済ませたヌエルが、キアスに付き合う。

港方面へ向かうトラックの荷台には、ミングスをはじめ、いつものように仕事に出かけるアナ・ボトルたち数人と彼らの荷車が載った。キアスとヌエル、それに私がそこに便乗する。2人は今日は仕事の用意をしてきていない。荷車はカンブン・ソロールに置いたままで、服装もいつもよりだいぶござっぱりとしている。

トラックを降り、しばらく歩く。まずは、路地に入ってすぐのところにあるキオスクに寄る。客が買った酒を飲んでくつろぐための机と椅子が置かれている。みなで出し合ったお金で1リットル入りのウイスキーを1瓶と栄養ドリンクを1本買い、プラスチックのポットの中に全部あけて、かき混ぜる。女たちのもとへと行く前に、これを飲んで勢いをつけようというのだ。路地の奥にはコンクリートの塀で囲まれた区画があり、その内側にはセメント作りの長屋形式の部屋が数十建ち並んでいる。それぞれの部屋の前や中で、女たちが思い思いのかつこうで客を待っているはずだ。

キオスクにはミングスも一緒について来ていて、自分の荷車を脇に停めて、酒につきあった。さらにあとから、別のトラックで来たメノットとカ・ボルシェの2人が加わった。酒を酌み交わしてひとしきりおしゃべりをすると、キアスとヌエルは出て行った。後から来たカ・ボルシェも、しばらくしてキアスたちの後を追っていった。ミングスとメノットと私で、まだ残っていたウイスキーを飲み干した。ミングスは空になったウイスキーの瓶を、自分の荷車に積んだ。

そのまま待っていても仕方がないので、私たち3人はとりあえずキオスクを出て、表通りに出た。時刻はすでに1時に近かった。ミングスと私は、2人で赤い顔をして日陰に座った。メノットは適当な場所でごろりと横になると、気持ちよさそうな顔でそのまま眠ってしまった。

「日本に帰るときには、忘れずに電話番号を教えていってくれよな。何かあったときには、助けを求められるように。」唐突にミングスが言った。どうやらミングスは、「アチエ行き」についてずっと考えていたらしい。「自分がアチエに行ったとして、その後自分や村に残した妻や子どもに何かあったときには……」という話だったようだ。

「アチエで仕事があるらしい。」アナ・ボトルたちの間では、このころ「アチエ行き」が話題になっていた²⁾。津波による大きな被害を被ったアチエで、町を再建する工事が進んでいる。それに必要な労働力が、この町からも募られている。そんな情報を誰かがどこかから仕入れてきたのだ。

何人かの話をまとめるとこうである。「希望者には、支度金として600万ルピア（約7万円）が貸与される。これで書類作成、渡航費用、旅行中の食費その他もろもろをまかなう。現地では、1ヶ月の仕事で300万ルピアを手にすることができる。いま、クパンのジャラナンカ（地名）で登録を受け付けている最中だ。必要な人数がまだ集まらないといって、昨日も係の者がカンブン・ソロールまで来ていた。ファヌスとソレの兄弟、ダン、カ・ボルシエ、ミングスら、大勢が行くことになる。カノルまでもがいっしょに行くと言っている。」

クパんでのアナ・ボトルの稼ぎは、個人差はあるが、町での生活で使ってしまう食費やその他を差し引いて1ヶ月でだいたい20～30万ルピアが手元に残るといところだ。カノルら少年たちの多くは、1日に1万ルピア稼げたらかなりよい方で、その日の食費をкаろうじて稼ぐだけのことも多い。それが、アチェでは毎月300万ルピアも稼げてしまうというのだ。

「アチェから村まで、どうやってお金を届けたいんだろう？ 今のように、村まで自分で持っていくのは無理だし、誰かに預けて持ってもらうこともできないぞ。」
「銀行だ。『口座』というものをもっている誰かに頼んで、使わせてもらうのだ。『口座』があれば、受け取ることができる。」

「5月7日には出発だ」

「ミングスは村に4人も子供がいるというのに、アチェに行っている間は、なにを食べさせる気なんだろう？」

アチェ行きの情報は、一時帰郷したアナ・ボトルや、町の市場にときどき野菜を売りに来ている女性たちによって、トランクロードを伝わり、日本軍によって切り開かれたという道路を抜けて、すぐに村へもたらされた。

「毎月300万ルピアもらえるんなら、そのうちの200万ルピアは村に送ってもらおうじゃないか。」

カノルのおばさんは不安げな表情で言う。「あんな子どもがついて行って、いったい何をするっていうのかしら？ 早くやめさせないと。」

アチェでどんな仕事をするようになるのか、ミングスらに尋ねてもはっきりとはわからない。「とにかく向こうへ行くんだ。そうすれば仕事にありつける。」出発日や給料の額などがやけに具体的である一方、肝心な情報がまだかなりあいまいだった。ミングスは迷っていた。「ああ、どうするべきだろう。俺も行くべきだろうか、やめておくべきだろうか？」酔いも手伝ってか、すがるような目をして意見を求めてくる。私にはなんとも答えようがなかった。

アチェ行きをどうするかはともかく、この日、ミングスの荷車にはまだウイスキーの空き瓶が1本転がっているだけだ。こんな状態でカンブン・ソロールに帰れるのかと問うと、「そりゃ帰れるさ。だって大事なことは、逃げないこと、盗みを働かないことな

んだから」と言った。「盗み」というのは、少年たちの中に、ゴミ捨て場で拾い漁るだけでなく、他人の家の庭などに無断で入って古い鍋などをかすめていく者がいることを指している。もちろんこの2つを守っただけでボスが納得するはずはないことを、ミングスは自分でよくわかっているはずだ。

「クパンで働くのは、もううんざりなんだ。」いかにもつらい、やりきれないという表情でミングスは言った。「ああ、女と遊んでいないのは、俺だけじゃないか。」ミングスにはそんなお金の余裕がないのだ。カ・ボルシェの荷車には、行商用の商品がたくさん吊るされていた。一方ミングスの荷車には、今朝膨らませていたボールが5つ吊ってあるだけだ。

やがて、キアスとヌエルが帰ってきた。表通りでしばらくかかって、帰りのトラックをつかまえた。ゴミ収集用のトラックの、においが染み付いた金属の荷台に、みなで乗り込んだ。カ・ボルシェはまだ戻ってこないが、彼はまだこのあたりを回って仕事を続けるはずだ。相変わらず眠っているメノットはほうっておくことにした。

からっぽの荷車とともに乗り込んだミングスだったが、カンブン・ソロールそばの教会わきでトラックを下りると、ボスの元へそのまま帰ろうとはしなかった。だいぶ暗くなってから、彼は荷車にそれなりの量の空き瓶を積んで帰ってきた。

それから数日がたち、4月が終わろうとしていた。5月7日まで、もう10日も残っていない。彼らの中からいったい誰がアチェに行くのかは、まだはっきりしていなかった。行くという話を聞いたので私が当人に尋ねてみると、まったくそんなつもりはないという答えが返ってきた。シモンによれば、彼の兄のダンのほかに、ファヌスとソレの兄弟とハニスらが行くということだったが、ハニス自身は行くつもりはないと私に言った。カ・ボルシェも行かないと言った。

ミングスは、「9月か10月に大きな儀式があるから、俺といっしょに村に行こう」と私を誘った。「でもそのころには、お前はもうアチェにいるんじゃないのか」と聞き返すと、「そんなことはない」と彼は言う。「じゃあ行くのはやめたのか?」「まだよく考えているところだ。情報を集めているんだ。」「情報って、いったい誰から集めるんだ?」「そりゃ、仲間たちからさ。」

5月7日が過ぎた。アチェに行った者は1人もいない。

話はただ立ち消えてしまった。嘘をついた、無責任なうわさを流したとあって、誰かが非難されることはなかった。根拠のない情報に振り回されたという決まりわるさも、誰にも感じられなかった。あれほど熱っぽく語られていたアチェへの旅立ちの話は、ただ忽然と消えてしまった。

それからもたびたび、「ジャカルタに行く」「バリに行く」「軍隊に入るためのテストを受ける」といったことが、道でその日に偶然出会ったという公務員や軍人などからもたらされた話として、彼らの間で突然話題にのぼることがあった。そのたびに彼らの関

心はかきたてられ、話にのるかそるかが熱っぽく議論され、新天地への希望が語られる。そしてやがて、やはり跡形もなく消えていくのだった。

アチェ行きメンバーに名を連ねていたファヌスは、おしゃれに余念のない若者だった。彼は仕事上がりの水浴びを済ますと、鮮やかな色のシャツをはおり、赤く染めた髪を鏡の前でしばらくもてあそぶと、しっかりとキャップを被って、夜の町へよく出かけていった。恋人をキャンプ・ソロールに連れてきたりもした。「アチェ行き」の一件があって少し経ったところに、彼は彼女と結婚した。妊娠がわかった当初、ファヌスは逃げてしまおうとしたが、相手側の親族とも結局は折り合いが付き、まるく収まったらしい。ファヌスは廃品回収業を切り上げて村へ戻っていった。もう一人前の大人なのだから、村の自分のトウモロコシ畑で掘り棒を握りしめ、乾ききった固い土を掘り起こさなければならぬ。村で何らかの集まりに招かれれば、相応の贈り物を準備して駆けつけなければならない。だがまたしばらくすれば、キャンプ・ソロールへと舞い戻り、ミングスたちのように廃品回収業をして妻子のためにお金を稼ぐことになるだろう。

アナ・ボトルの間で「アチェ行き」が語られていたときに、1人が心配そうに言っていた。

「ミングスは村に4人も子供がいるというのに、アチェに行っている間はなにを食べさせるというんだろう？」

これは、彼ら村人にとって家族に食べさせる食べ物とは、ほかでもない「自分たちでつくったトウモロコシ」であるということを物語っている。「アチェの仕事でお金がたくさん入るのだから、村に残った妻と子はそのお金で、市場に行って米やトウモロコシを買って食べればよい」という考えにはならない。村人たちにとって食べるとは、自分たちでつくったトウモロコシを、トウモロコシや祖先に感謝しながら食べることなのだ。町で何年ものあいだ廃品回収をしてお金を稼いできた経験を持ちながらも、彼らは農民のままで世界を見つづけている。

4 道の果てるところで——ストリートの希望

アナ・ボトルたちのもとへは、誰かがさまざまなチャンスの話を持ち帰ってくる。その行く先がアチェなのかジャカルタなのかはわからないが、ストリートは村人たちにとっても、どこかへ向かってたしかに開かれている。ストリートにはいつも、何か大きな変化が起きそうな予感がある。でもたいていは、何も起きない。

村人たちは、バスやトラックの荷台に乗り込んでクバンにやってくる。道はクバンへと延びており、村とクバンのストリートをとしかに接続している。だが道は、クバンに至るとそこで途絶える。村人たちにとって、クバンのストリートは道の終着点なのであり、その先の世界へは海によって隔てられている。クバンからさらにその先への道は、

今はまだどこにもつながっていない。

ティモール島の周辺に位置するロテ、サブ、アロール、フローレスといった島々については、アナ・ボトルたちにもいくらか想像が及ぶだろう。町にはそうした島々から来た多くの人々が暮らしているからだ。だがその向こうには、かろうじて名前を聞き知っているだけの非場所的な世界が、アチェだろうとジャカルタだろうと、マレーシアだろうと日本だろうと、ほとんど同じような速さでただ茫漠とひろがっている³⁾。

村人たちは町へやってきて、今日もストリートへと出かけていく。ストリートには、今の生活とは異なる未来への可能性がたしかに漂っている。ブルデューは、願望とその実現の可能性について次のように言っている。

現実的な可能性が増すにつれ、願望は、より現実主義的となり、現実的な可能性にたいしてより厳格に節度あるものとなる。(略) すなわち、願望は、それが充たされる可能性が増大すると、その限界をはっきりとさせる。なぜなら、おそらくは、介在する困難についての意識がより鋭くなるからである。あたかも、すべてが全く可能でないなら、全く不可能なものはない、というように、人々は、可能性と不可能性について、考慮するようになるのである(ブルデュー 1993: 96)。

アナ・ボトルたちの生活を見ていると、彼らは何もかもが不可能であることによって、何もかもが可能であるかのように感じているのではないかと思えることもあった。

だがここで、願望というものをいったん、現実的な可能性や展望などから切り離して考えてみよう。春日は太宰治の作品について分析しながら、「希望」について論じている。

文化とは、すなわち言語や物腰、趣味や感覚などとして身体化された〈意味表現〉であるとなることができる。だがこの〈意味表現〉が何を意味するのかについて絶対的な同定をしようとはしないのが、太宰の作品に登場する人物たちがとる態度である。彼らはしばしば信条や気概を口に出すが、いつもどこかに仮象性を漂わせている。彼らが口に出した言葉には、この仮象性によって緊迫感と遊びが同時に引き出されている(春日 1998: 176)。

太宰が絶望と希望について語った一節を引いたうえで、春日はつぎのように言う。

希望が明確な内容や展望を必要とするならば、ここで記された希望は希望ではない。けれどもそれは、絶望が絶望そのものでないかぎりにおいて、確かに希望と称される。〈意味表現〉と〈意味内容〉の合一化が訪れないかぎり、希望は希望になりきれず、絶望も絶望そのものではない(春日 1998: 183)。

私たちはしばしば忘れてしまうが、そもそもわれわれの生活とは「つねに未完結で、そら恐ろしいほど未知で統制困難な領域に向けて開かれて」(春日 1998: 181) いる。そこにおいて希望を希望たらしめているのは、その実現可能性や、内容や展望の明確さで

はない。また希望が、解釈と行為との整合性をつねに求めるとは限らない。その意味では希望とは希望そのものにはなりきらないのだが、同時に絶望も完全な絶望そのものにはなりきらない。希望はその実現可能性や整合性が問題になるよりもはるかに根本的なところで、その非決定性によって希望たりえている。

希望についてのこうした議論をふまえると、アナ・ポトルたちのストリートでの生活がより見えてくる。彼らの間で新天地を目指す話が急速に盛り上がりは消えていく。新たな村人が町へとやってくる。疲れ果てていったんは村に戻った父親たちも、やがて町に舞い戻ってくる。彼らが町に見出しているのは、村での人生とは異なる非決定性に満ちた町での生活であり、絶望そのものではない絶望とないまぜになった、希望になりきれない希望なのだ。

カノルのようなまだ幼い少年たちが、クバンでの暮らしの中で浮ついたはしゃいだ様子を見せる。カノルらよりも年上のジュリは、シニカルで何かを諦めているようだが、決してすっかり希望を失っているわけではない。彼はこれから、遊び人のパチェのようにそこそこ器用に町で生きていくのかもしれないし、ファヌスのように、アナ・ポトルを続けているうちにやがて結婚し、村で所帯をもつようになるのかもしれない。

カノルは言う。「大人になったら廃品回収はやめて、村に帰ってトウモロコシをつくるのさ。」じっさいファヌスはそのような生活へと入っていった。4人の子どもをもつミンクスは、町でめぐりあった「アチェ行き」という新たな可能性を前にして、深刻な戸惑いを見せた。幼いカノルが大人になるころには、彼らの村とクバンでの生活も、今の大人たちとは大きく変っているのかもしれないし、大して変わっていないのかもしれない。それがどちらとも言い切れないところに、希望が生じてくる。

クバンのストリートには希望がある。それに引き付けられて、少年たちは村を飛び出してくる。村人たちが町で抱く希望は、その多くがあっけなく消えてゆくが、彼らの生活はそれでもつづいていく。

注

- 1) アトニ・メトの成人男子に対して行われる割礼については、(McWILLIAM 1994)を参照。包皮を切除したあとの傷は、縫合されないのがふつうである。この傷は、間隔をあけて3人の女性と性交することによってはじめて完治させることができるとされ、当人はそのあいだ妻子から隔離される。キアスは包皮の切除を村で行ったが、3人目の女性をなかなか見つけることができなかったので、手っ取り早く町で売春婦を買って済まそうと町まで下りて来た。
- 2) 2005年4月ごろのことである。
- 3) 中川は、東インドネシア、エンデの人びとの出稼ぎの経験について論じる際に、「非場所」の概念を用いている(中川1999)。本稿での「非場所」の意味は、この中川の用法に拠っている。

文 献

ブルデュー, P.

1993 『資本主義のハビトゥス——アルジェリアの矛盾』原山哲訳, 藤原書店。

春日直樹

1998 『太宰治を文化人類学者が読む——アレゴリーとしての文化』新曜社。

McWILLIAM, A.

1994 Case studies in dual classification as process: childbirth, headhunting and circumcision in west timor. *Oceania* 65 (1): 59-74.

森田良成

2008 「貧乏——『カネがない』とはどういうことか」春日直樹編『人類学で世界をみる——医療・生活・政治・経済』pp. 263-279, ミネルヴァ書房。

中川 敏

1999 「学校者と出稼ぎ者——エンデの遠近両用眼鏡」『国立民族学博物館研究報告』23 (3): 635-658。



写真1 朝、通りにアナ・ボトルが集う



写真2 荷車をトラックに載せて出かける者たち



写真3 廃品回収と行商を兼ねたスタイル



写真4 ボトルの計量



写真5 積み上げられた廃品



写真6 金属部品を分解する少年たち



写真7 雑居小屋での昼寝

